

聞き上手なお母さん その3

前号の学校から帰ったときのミチコちゃんとマサオくんをもう一度振り返ってみましょう。

「学校、楽しかった？ お友達と仲よく遊べた？ けんかしなかった？ 誰と遊んだ？ 先生のお話よく分かった？ お話、よく聞いてた？ 先生、どんなことお話した？ プール入った？ 寒くなかった？ 泳げるようになった？ 給食はおいしかった？ きらいなもの、なかった？ 全部食べられた？」

ミチコちゃんのお母さんは、ミチコちゃんの学校での様子を知りたくてたまりません。次から次へと、まるで機関銃のように質問を浴びせます。ミチコちゃんは、もううんざりです。答えるどころか、耳を覆いたくなくなってしまいます。

マサオくんはどうだったでしょうか。マサオくんは、じゃんけんバトルのことをお母さんに伝えたくて勇んで学校から帰ってきます。そして、かばんを下ろす暇も惜しげに「お母さん、あのね」と切り出します。

「今日の帰りの会、バトル。すごくおもしろかった。」マサオくんの息せき切ったような話しぶりを見れば、お母さんに早く分かってほしくて説明するのでもどかしいというマサオくんの気持ちがよく分かります。ところが、ひよんなことから話が変わり、「何で（本を）借りてこなかったのよ。」と責められる羽目になってしまいます。「話さなきゃよかった。」自分の嬉しさ、楽しさをお母さんに共有してほしいと思って一生懸命話していたマサオくんは、勇みの度合が大きかっただけに打ちひしがれる度合もそれだけ大きくなります。その思いは、その後も二度、三度と繰り返されます。

このようなことがたびたび繰り返されれば、ミチコちゃんやマサオくんはどうなっていくのか、もう言うまでもないでしょう。

「また始まった。もう聞きたくない。」— これはミチコちゃんです。「言わなきゃよかった。話さなければよかった。もう話さない。」— これはマサオくんです。ミチコちゃんもマサオくんも次第に口数が減っていきます。いわゆる無口化です。並行して、覇気がなくなり、表情も乏しくなっていきます。ミチコちゃんのお母さんは、ミチコちゃんに学校での様子をいっぱい話してほしいのに……。マサオくんのお母さんも、本当は元気なマサオくんの話をいっぱい聞きたいのに……。二人は話してくれません。

学校から帰ってかばんを干しているヒロシくん(中1)に、お母さんが尋ねます。「どうしたの。何でかばん干してるの。」「プールに落としちゃった。」「プールに？」お母さんは怪訝そうな顔をして聞き返しましたが、ヒロシくんはそれには答えず、足早にその場を離れました。

心に引っかかるものを感じたお母さんは、かばんを手にとってみました。プールに落としたと言ったかばんですが、手にしたかばんからは牛乳のにおいが立ち昇りました。開けてみると、かばんの底にはたくさんの砂がこびり付いていました。お母さんは、大きな不安に襲われました。

「エリコ(中2)、あなた学校で何かあったの。」「ううん、別に。」「ダイスケくんのお母さんが知らせてくれたんだよ。あなた、今日、学校でヨリちゃんたちに囲まれてたって。何か泣いてるみたいだったって。本当？ヨリちゃんたちに何かされたの。」「別に。何でもないよ。何でそんなこと聞くの。」「だって、心配だから。」「もう、うるさいなあ。関係ないよ。黙っててよ。」「……………」

前々号の「聞き上手なお母さん その1」に出てきた二人のお母さん。あのお母さんたちの素晴らしさが改めて、思い直されます。